

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 富田広樹

本論文 'La nación escenificada. Estudio de las tragedias neoclásicas españolas en la época de la reforma teatral del conde de Aranda' (「舞台の上のネイション アランダ伯爵の演劇改革期におけるスペイン新古典悲劇の研究」) は、啓蒙改革の時代といわれる 18 世紀後半のスペインにおいて、演劇改革を推進したアランダ伯爵の周辺で作られた新古典悲劇を取り上げ、これらの作品が、当時のネイション・アイデンティティ意識の生成に寄与していたことを検証するものである。18 世紀初めまで、スペインは複数の王国の連合体であったが、1701～13 年の王位継承戦争後、フランスにならった中央集権化政策が導入され、ひとつの統一体としてのスペインが志向されるようになり、やがてスペイン独立戦争中の 1812 年に、国民主権をうたうカディス憲法が、短命ではあったものの、制定されるに至るといふ歴史的背景がある。スペイン新古典演劇は、アランダ伯爵の後押しを得て、1760 年代末から 70 年代初めにかけての短い期間に花開いたが、この時期の演劇がネイション・アイデンティティをどのように提示していたのかという観点から分析するという本論文の試みは斬新で、18 世紀スペイン文学研究にあらたな光を与えるものである。なお論文はスペイン語で執筆されている。

全体の構成は、序章、本論 7 章、結論からなり、本論 7 章のうち最初の 2 章は歴史的背景の紹介、先行研究の検討、本論文で使われる分析方法の説明にあてられ、続く 5 章で具体的な作品分析を行う。各章の概要は以下のとおりである。

第 1 章 *La identidad nacional en España* (スペインにおけるネイション・アイデンティティ) では、王位継承戦争後、人々がスペイン国民に帰属するという意識をもちはじめたのが 18 世紀であることを、これまでの歴史研究を参照しつつ説明する。また *nación* ネイションという言葉の概念が、時代とともに変化したことを確認する。さらにネイションの定義として従来からある三つの学説 (原初主義、近代主義、エスノシンボリズム) を検討したうえで、本研究ではネイションを形成する言説分析という手法を用いること、とくにアイデンティティ、時間、空間の三つの観点からの言説に注目することが示される。また 18 世紀演劇に関する先行研究で、ネイション・アイデンティティを問題にしているものがきわめて少ないことを確認する。

第 2 章 *Las tragedias neoclásicas* (新古典悲劇) では、新古典主義の悲劇が権力に近いエリート層を対象に上演されたこと、演劇に教育的な役割が期待されたこと、真実ら

しさを演出するためにアリストテレスの三一致の法則の遵守が重視されたこと、カルロス三世の治世下でカスティーリャ顧問会議議長として実権を握ったアラング伯爵（1766-1773）が新古典主義に則った演劇改革を進めたことなど、この時代における演劇状況の概略を述べる。また新古典様式の基礎である三一致の法則について、当時の文学理論家であったイグナシオ・デ・ルサンの『詩学』に基づいて検討する。そのうえで、真実らしさを生み出すための三一致の法則の三要素、筋・空間・時間が、ネイションを形成する言説の三つの要素と重なり合うことを指摘し、本研究独自の理論的基礎を確認する。以下、第3章から第7章にかけて、アラング伯爵の演劇改革の影響を受けて作られた五つの悲劇の分析にはいる。

第3章 *La muerte de Munuza de Gaspar Melchor de Jovellanos* では、ガスパール・メルチョール・デ・ホベジャーノスの『ムヌーサの死』を扱う。8世紀初めイベリア半島がイスラーム勢力に征服され、ヒホンの町が暴君ムヌーサの支配下におかれたとき、西ゴート族の血を受け継ぐアストゥリアス人らがペラーヨを中心に立ち上がり、ここからレコンキスタ運動が始まったとされるエピソードを描いた戯曲である。ヒホンが、住民たちによって首領に選出されたペラーヨに表象・代理される一方で、全スペインの運命がヒホンのそれに重ね合わされ、ペラーヨはスペインの英雄にほかならないことが舞台上で示唆される。観客の前で西ゴート族の記憶とレコンキスタの勝利、その後のスペインの未来が一本の時間軸でつながり、「われわれ」という集合体は時間的に断絶のない一貫性を獲得する。

第4章 *Solaya o los circasianos de José de Cadalso* では、ホセ・デ・カダルソの『ソラーヤあるいはチェルケス人』を取り上げる。物語の舞台はスペインから遠く離れた、黒海とカスピ海にはさまれたチェルケス国。チェルケスはタタール人の属国で、その土地の娘たちを貢ぎ物として召し上げるために派遣された王子セリンと元老院議員の娘ソラーヤが恋仲になり、娘は祖国を選ぶか愛を選ぶかの選択を迫られるが、結局二人は娘の兄たちによって殺されるという悲劇である。ソラーヤがチェルケスの娘たちと重ね合わされ、また父親の元老院議員がチェルケスを表象・代理する人物であることで、個の問題が集団全体に敷衍される。時代は正確には指示されていないが、元老院議員のかつての武勲が述べられることで過去が作られ、タタール人のくびきから解放される未来がうたわれることで、チェルケスの歴史的連続性が示唆される。

第5章 *Numancia destruida de Ignacio López de Ayala* では、イグナシオ・ロペス・デ・アヤラの『ヌマンシアの滅亡』を分析する。この戯曲は紀元前2世紀にローマ軍のイベリア半島侵攻に抵抗したケルト・イベリア人が、ヌマンシアの町に14年間籠城し、最後に生き残った住民全員が集団自決した逸話を扱う。舞台の上は、「われわれ」の空間であるヌマンシアと「他者」の空間であるローマ軍野営地が城壁で隔てられている。ロ

一マ軍に包囲されたヌマンシアは、イベリア半島の他の地域から援助を受けることなく孤立し、住民は強い団結力をみせるが、その孤立と団結が、ヌマンシアをスペインと結びつけ、両者の表象・代理関係を可能にしている。劇のなかでは、カルタゴやローマの侵略以前の神話的時代が言及される一方で、ヌマンシアの名前が未来永劫讃えられスペインの名声を高めることが予言され、観客の現在につながる歴史的一貫性がうたわれる。

第6章 *Guzmán el Bueno* de Nicolás Fernández de Moratín では、ニコラス・フェルナンデス・デ・モラティンの『グスマン・エル・ブエノ』を論ずる。これは、イベリア半島最南端に位置するタリファ城塞の司令官アロンソ・ペレス・デ・グスマンが、イスラーム教徒に捕らえられた息子ペドロの命を救うか、城塞を明け渡すかの苦渋の選択をせまられ、ついに祖国への忠誠を選び、城塞を守るという 1292 年にあった事件を題材にした悲劇である。良き臣下としての祖国への忠誠と、良き父親としての家族への愛とが天秤にかけられるが、グスマンは、タリファの防衛はスペイン全土の防衛であり、全スペインの期待が自分にかかっていることを吐露する。ここにグスマンとタリファ、タリファとスペインのあいだの表象・代理関係が成立する。戯曲はレコンキスタの苦難の歴史と、過去に英雄を輩出してきたグスマン一族に言及し、グスマン家によってスペインが将来にわたり守られることへの希望が述べられて、時間の連続性が示される。

最後に第7章 *Raquel* de Vicente García de la Huerta で、ビセンテ・ガルシーア・デ・ラ・ウエルタの『ラケル』を取り上げる。これは、アルフォンソ8世がユダヤ女性ラケルを寵愛し、ユダヤ人を重用して政治を行ったため、それに反発したカスティーリャの臣下たちが計らってラケルを殺害するという歴史上のエピソードがもとになっている。ここで「われわれ」と「他者」を分けるのは宗教で、君主としての責任を放棄した王と臣民とのあいだの表象・代理関係の破綻を回復することがこの悲劇の主題である。舞台は王宮という閉ざされた空間のなかで展開する。異教徒／外国人に蹂躪されるスペインという点で、上演時（1771年及び1778年）の観客は、イタリア出身の官僚たちによる性急な改革への反発から起こった1766年のエスキラーチェ暴動と重ねてこの悲劇を見たはずである。

以上の5つの戯曲の分析から次の2つの考察を導き出す。第一に、新古典悲劇はアイデンティティ、時間、空間の三つの次元における個と集合の表象・代理関係にもとづいて構築される。個別の登場人物によって集合全体が代理され、個別の空間がその集合の空間へと拡大される。同時に舞台上で推移する時間は、その集合の過去と未来が結び合わされ、時間的連続性を与えられる。その延長上に舞台を見つめる観客の現在がある。第二に、新古典演劇では、その教育的機能が最大限発揮されるために、真実らしさを舞台上で演出し、観客に共感を覚えてもらうことが必要であるとした。そこで三一致の法則の厳密な適用が求められたが、その法則はネイション概念を形成する言説の三要素を

表現するのに適した方法であった。

ここから著者は以下の結論をえる。新古典悲劇がネイションのアイデンティティ形成に果たした役割は、表象・代理関係を利用して、舞台の上に提示される集合のモデルへの同一化を通じ、観客がネイションとしての自己認識を可能とする前提条件を準備したことである。新古典悲劇は、観客にネイションとはなにかを説明するものではなく、舞台の上で示される集合のモデルに観客を包摂し、その集合の一員であるという感覚を経験させるものである。演劇がもつ教育的機能とあいまって、ネイション形成の言説に必要な要素を備えた劇作上の規則を遵守する新古典悲劇は、18世紀の観客に、ネイションとしての自己認識を可能とする場を提供した。

以上が要旨である。

本論文はスペイン文学史のなかで最も研究が遅れている18世紀文学を取り上げ、作品の精緻な分析を通して、新古典悲劇がこの時代のネイション・アイデンティティをどのように提示しえたのかを明らかにしたものであり、その斬新な発想にもとづく本研究は画期的な業績であると評価できる。また個々の作品の執筆背景や同時代人の評価などを膨大な資料のなかから探し出して同時代における作品の位置づけを丹念に行っていること、18世紀スペインにおけるネイション・アイデンティティ形成という大きな文脈のなかでそれらの作品解釈をしていること、国際的な場で研究成果を発信したいという強い意志のもと、スペイン語で論文を執筆したことも、高く評価できる点である。

しかし審査の過程では、本論文のいくつかの弱点、問題点も指摘された。第一に、ネイションの定義や分析方法などの理論的な説明が、うまく整理して書かれていないことと、理論を扱った前半部と作品分析を扱った後半部が有機的に結びついていない点である。第二に、他の地域や他の時代との比較という視点が見られない点。たとえば同時代のフランス演劇、あるいはスペイン19世紀の演劇への言及があれば、本論文はより説得力をもちえたであろう。これらに加え、取り上げた五つの作品の選択基準、その数が適切であったかという疑問や、演劇と教会の関係についての考察が欠けているという指摘があった

しかしながらこうした弱点、問題点は本論文の価値を否定するものではない。本論文は、18世紀スペイン文学研究にあらたな光を与えるものであり、そのオリジナリティにおいて今後の18世紀文学研究の重要な参照点となるはずである。したがって本審査委員会は全員一致で本論文が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。